

さのちるかたに、みふねすみやかにこがしめ給へと、まうしたてまつる。○中 卅日、あめかせふ
 かず、かいぞくは、よるあるきせざなりとき、て、夜なかばかりに船をいだして、あはのみとをわ
 たる、よなかなればにしひんがしもみえず、おとこをんなからく神ほとけをいのりて、このみと
 をわたりぬ。○中 けふ海になみににたるものなし、神ほとけのめぐみかうぶれるにたり、けふ
 ふねにのりしひよりかぞふれば、みそかあまりこ、ぬかに成にけり、いまはいづみのくに、き
 ぬれば、かいぞくものならず。○中 六日、○月二みをつくしのもとよりいで、なにはにつきて、か
 はじりにいる、みな人々をんなおきな、ひたひにてをあて、よろこぶ事ふたつなし、

〔更科日記〕十三になるとしのぼらんとて、九月三日かどでして、いまだちといふ所にうつる。○中

かどでしたる所は、めぐりなどもなくて、かりそめのかや、のしとみなどもなし。○中 おなじ月
 の十五日、雨かきくらし降に、さかひ○常陸下野の國のいかたといふ所にとまり

ぬ。○中 國にたちをくれたる人々まつとて、そこに日を暮しつ、十七日のつとめてたつ。○中 その
 夜はくろどの濱といふところにとまる。○中 そのつとめてそこをたちて、下つさのくにとむさ

しのさかひにて有ふとゐがはといふ、かゝみのせ、まつさとのわたりにとまりて、夜ひとよ舟に
 てがつく物などわたす。○中 つとめて舟に車かきすへてわたして、あなたのきしにくるまひ

きたて、をくりにき。○き原作はつる人々、これよりみなかへりぬ、のぼるはとまりなどして、い
 きわる、ほど、行もとまるもみななきなどす。○中 ましもと云所も、すがくとすぎて、いみじく

わづらひ出て、遠江にかゝる、さやの中山など越けんほどもおぼえず、いみじくくるしければ、て
 んりうといふ川のつらに、かりやつくりまうけたりければ、そこにて日ごろするほどにぞ、や

うやうをこたる、冬深くなりたれば、河風はげしく吹上て、たへがたくおぼえけり。○中 二むら山
 河○三の中にとまりたる夜、大きなかきの木の下に、いほをつくりたれば、夜ひとよいほのうへ